

## 史料室だより

題字デザイン 高岸 昇



内海愛子「平和研究入門」講義風景（1994年度大学案内より）

## 「平和研究入門」に見る恵泉女学園大学の平和教育

恵泉女学園大学の平和教育の源は、創立者河井道の信仰に端を発する。キリスト教の一信徒河井道は、第一次世界大戦後のヨーロッパを歴訪した。その惨状を目にし、「戦争のない世界を作るためには、キリスト教精神を基に、世界に開かれた人間、世界平和に貢献する女性を育てていくことである」との理想を持って恵泉女学園を創立した。高等部・留学生科・専門学校・短期大学と発展したが、第二次世界大戦中も、その後の年月も平和を希求する姿は変わることはなかった。

1988年に大学が開学し、初代学長村井資長は、第一回入学式式辞で次のように述べた。「恵泉女学園大学を開設したのは、真の平和を担う、女性の学問探究の場を造るためだったのです。(中略) 創立者、河井道先生の祈り、それは皆さんが真の平和を担う女性として育つことです。」そして恵泉女学園大学を、平和を目指す女性の大学であると位置づけ、平和を学問として研究していくことを本格化した。

当初科目名は、「平和学」であったが、1992年に「平和研究入門」へと変更され今日に至っている。

さらに学園は、平和文化研究所（1997年）、大学院平和学研究科（2009年人間社会学研究科より名称変更。日本で初の平和学修士号授与）、花と平和のミュージアム（2014年）を開設し、より一層平和教育を充実する方向へと歩んできている。

大学を開学して30年。平和研究入門は、他大学にない次のような特色を包括しながら、現在も進展している。

●平和研究入門を必修としたことは、国際機関等で活躍す

る人材養成を目指すだけでなく、平和に貢献する市井の市民を育成することを意図している。

●自分達の暮らしにある身近な事例から地球規模の問題まで、多彩な内容を扱い、机上の学習で終わるのではなくフィールドに繋がる体験を重視している。

●研究分野の個性を大事にしながらも、共通項目として四原則（①非暴力の徹底 ②直接・構造的・文化的暴力を立体的に ③最も底辺に置かれた人の視点 ④歴史的背景）で授業を構成する。

これまで担って下さった諸先生の歩みを土台に、現在大学は大日向雅美学長のもと、「生涯就業力」育成を教育目標の中心として掲げている。生涯就業力とは「何があっても、いつどこにあっても、自分らしい目標と希望を失わず、しなやかに凛として生きる力」を意味し、そのために「基礎的な知識・理解・技能」と「現状を把握し、たくましく解決し続ける力」、そして「他者と共に歩み、共に生きていける力」を養うことを大切な要件としている。

「他者と共に歩み共に生きていく」、これこそが平和への道である。

恵泉女学園大学の平和教育がさらに深さを増し前進していくように願っている。

「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。(マタイによる福音書5章9節)」

(学園長 中山洋司)

## 恵泉女学園大学開学と「平和学」

秋田稔第4代学園長は、『恵泉女学園五十年の歩み』（1979）前書きで「河井道先生は、1929年世界の歴史が急速に戦乱の方向に傾き始めた時に、むしろこれに抗して…真の平和の世界を創り出す目覚めた女性を育てようと、恵泉女学園をおつくりになった」と記し、「人間としての目覚めへの教育を推進するためには…内と共に外を本当に知る国際教育を学園教育の中できちんと位置づけねばならない。これらをふまえると、大学レベルの教育の可能性を今後考えることとなろう…」(「恵泉」318号)と大学開学への思いを書いている。

1981年に学園協議会が設置され、将来構想の検討を開始した。「長期計画学園長素案」には国際平和学科(仮称)の文字があり、「恵泉」329号に、「恵泉の未来を創り出す」と題して、第一期、第二期五か年計画、将来構想秋田私案を発表。「恵泉」330号に、『共に生きる人間』に皆でなりたい。共に生きることが確立する、これが平和の基であろう。」と記されている。

1980年度後期園芸生活学科で「総合科目」が、英文科では1981年度後期から総合科目としての「国際」が始まった。共通の「国際」ノートを使用し、藤倉皓一郎東京大学教授(当時)等学内外の教授陣が専門分野を講義した。また学期末には一泊二日の「国際ゼミナール」を行った。1986年度総合科目「国際 世界史の現在」の年間予定表には、「国際社会に向かってⅡ；平和の展望」栗野鳳担当とある。栗野はカンボジア大使(1973~75)、シリア大使(1976~78)を歴任し、退官後広島大学教授に就任した(1978~82)。1975年に開設された広島大学平和科学研究センターでは第二代センター長となり、日本平和学会会長を歴任。日本における平和学の草分けの一人だった。JVC(日本国際ボランティアセンター)、パレスチナの子どものキャンペーン、シェア(国際保健協力市民の会)等の設立にかかわり、晩年まで機関誌発送等のボランティア作業に夫妻で参加した。JVC関係者に「NPOの母ともいえる人」と評される妻の栗野美代子は、河井道の「国際」の授業を受け、留学生科生徒と共に学んだ恵泉女学園卒業生(普通部12回)である。

1985年2月発行の「恵泉」348号に秋田稔は7項目にわたる将来構想を発表し、文学、語学、国際の英文科3コース制の可能性に言及。「海外子女、留学生、社会人等を受け入れ、新キャンパスにおいて小さな国際社会を実現することを期する。」とあり、「幾年か後に、…国際教育部門を独立させ、社会で家庭で真の国際平和の心を生きる女性の育成を目指す国際平和学科あるいは国際教養学科(いずれも仮称)を創り、学園および地域の国際教育センター的役割を果たしうよう計画する。」と書いている。



大学開学当時の教授陣

1985年4月、常務理事幸田三郎(元青山学院短期大学長、臨時教育審議会委員)が恵泉女学園短期大学教授に就任。多摩ニュータウン南端に取得した用地での新キャンパス建設準備が始まった。理事会に設置された新キャンパス委員会、教育計画委員会が審議を重ね、1985年11月から1986年7月に、7回の大学創設準備会が開かれた。村井資長委員長の他委員として常務理事の秋田稔、一色義子、幸田三郎、そして大谷弘(短園)、木村忠(短英)、風間文子(高)、佐藤恵子(中)、大学設置準備室西沢正史等が参加した。第一回委員会で「高等教育の充実を図る必要」が秋田より説明され「intercultural、interpeople、平和問題などを考えようと短大の中で努力してきたが、2年の年限では無理と思われるようになった」と記録にある。第二回の委員会で「国際学部」や「平和学部」は前例がなく大学認可は困難との文部省回答を幸田、村井が報告。学部名、学科名に苦慮していることがわかる。第三回の委員会で「学部名は文学部か人文学部、学科名は日本文化学科と英米文化学科」と進展。将来計画委員会の議事録には、「1988年4月発足を指すなら理想は降ろさないが政策をとるということで学部は人文学部」と記載されている。また秋田はこの間、平和を学ぶ新大学の計画、カリキュラム案などを栗野に相談したことが書簡にも残されている。

1986年7月に第一次申請し、1988年に大学は開学した。幸田によれば、「2年間という最も短い期間で、大学の設置が認められた」(『恵泉の教育 継承と展開』)という。学長に村井資長、副学長に幸田三郎が就任。人文学部に日本文化学科と英米文化学科が置かれた。村井学長の第一回入学式式辞「考える大学、平和をめざす大学、地球大学」では「平和の意味を、もっと積極的に考えて見ようではありませんか。…この新しい恵泉女学園大学には、平和学、平和研究を専門になさっていらっしゃる先生方を、多くお迎えしました。平和学の先生がたは、ただ戦争のない状態が平和であるとは言いません。積極的に、真の平和というのは、あらゆる暴力や抑圧、あるいは差別や貧困のない状態をいうのです。」と平和学について説明した後「この度、恵泉女学園が大学を開設したのは、真の平和を担う、

女性の学問研究の場を作るため」と語っている。

内海愛子、金連縁（キン・レンエン）、石井摩耶子等と共に開学時の教授として栗野も就任。必修科目「平和学」を一年生に単独で教えた。外交官時代の経験を語ることは稀で、カント著『永遠平和のために』\*の熟読を薦め、学問としての平和学を静かに説いたと卒業生達は懐かしむ。退職の言葉には、「…私が密かに期待したのは、広義の平和（人権確保や健全な開発にも及ぶ）の領域で『南』の人々のためにボランティア活動をしよという学生が出てくることであった。しかし、このようなボランティアは大学生だけでなく、就職してからも、結婚してからも道は開けている。」（「恵泉」397号）とある。（松井弘子）

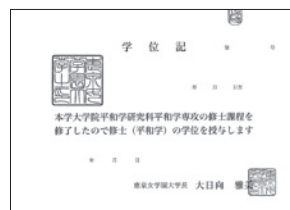
\* Immanuel Kant, ZUM EWIGE FRIEDEN, 1795

## 「平和学」から「平和研究入門」へ

1992年に講義名が「平和学」から「平和研究入門」となり、講義内容にも変化がみられるようになった。これは1991年に大学設置基準が改正され、多様で特色あるカリキュラムの編成が可能になったことによる影響が大きい。内海愛子や大日向雅美、宮治一雄、大橋正明ら複数の教員が担当し、在日韓国・朝鮮人、女性と戸籍、中東・アフリカにおける紛争、開発と南北格差など、各教員が専門とするより具体的なイシューに踏み込んでいくようになった。大橋正明は大学の教壇に立つNGO職員の先駆けであり、栗野鳳退職（92年度末）後の恵泉での平和教育の中核を担っていく。1994年から1997年までは担当教員名としては大橋単独となっているが、講義はオムニバス形式で学内の教員、学外の人材、そして時に恵泉の学生も登壇していたことがシラバスおよび本人の談からわかっている。平和研究入門という講義は特定の教員のみが担うのではなく、大学全体で作っていくのだという方向性が定まった時期といえる。この時期、シラバスには必ず「平和とは単に戦争や暴力のない状態ではなく、差別や偏見、格差のない状態と捉える」という文言が入れられており、これは恵泉における平和教育の原則（後述）の一つでもある。1998年からは再び複数教員担当制になり、内海、石井、宮治に加え古沢希代子や小泉允雄らが加わり、自分たちの暮らしにつながる身近な事例から地球規模の問題まで、より多彩なアプローチで平和について探る内容になっている。またちょうどこの頃、1999年に短期フィールドスタディ（短期FS）、そして2000年には長期フィールドスタディ（長期FS）も始まった。今でこそ現場体験プログラムを設ける大学は珍しくないが、恵泉はいち早く実施した。特にタイに5ヶ月滞在し、チェンマイ大学で学んだのち、各自のテーマに沿って現地NGOへ参加し文化、



2000年頃バングラデシュ短期FS（2002年度大学案内パンフレットより）



平和学修士号学位記

開発、ジェンダーなどについて体験学習する長期FSは、恵泉の平和教育における代表的なカリキュラムの一つといえる。なお望月賢一郎が中心となり短大がパヤップ大学と

合同で行っていた「タイ国際ワークキャンプ」も大学で引き継がれ、30年以上にわたりタイの山村での農作業・土木作業や、村の方とともに礼拝の時を持つなどの交流プログラムが続いている。

2001年大学院が開設された年に上村英明が非常勤講師として平和研究入門の担当に加わり、やがて大学院の平和学担当教員となる。2007年開設の大学院人間社会学研究科平和学専攻（2009年に平和学研究科と名称変更）は日本で最初の平和学で修士号を取得できる大学院であり、現在は韓国の聖公会大学などとの相互交流カリキュラムを有し国際協力機関やNGOなどで活躍している修了生も少なくない。2000年代に石井、内海といった初期担当教員が退職すると、NGOやODAでの実務を経た高橋清貴や、東南アジア地域研究・ジェンダー研究が専門の堀芳枝が担当になる。また開学当時からアジアとの関係を重要視してきた恵泉だが、2007年に韓国出身の李泳采（イ・ヨンチェ）、2008年に中国出身の楊志輝（ヤン・ヅフィ）が加わり、内海、石井、大橋といった初期の平和研究入門を支えた教員らの後継を担うとともに、日本とアジアの歴史的背景を重点的に学ぶこともできる体制になった。



開学当時から現在までの担当教員らは、研究だけでなく自分の「現場」を持ちNGO等での実務経験がある人材が多い（「平和研究入門」担当教員一覧表参照）。そのような中、2013年に堀芳枝ら担当教員の共著で『学生のためのピース・ノート』が出版された（2015年『学生のためのピース・ノート2』刊行）。平和研究入門のテキストとして、また大学2年次以降の恵泉での学びの手引きとして学生らに活用されることを主眼において作られたが、担当教員間の「平和教育」に対する共通認識を再確認する意義もあったという。同書に収録されている「恵泉の『平和教育入門』」（上村、堀、李、楊による座談会）では、恵泉の平和教育には「平和四原則」があると確認されている。一つは、非暴力の徹底。ともすれば平和維持のための武力保持・行使が是とされる現実において、恵泉が考える「平和」は暴力を手段として達成されるものではない。二つ目はヨハン・ガルトゥング\*の唱えた理論である、構造的暴力の視点。物理的な暴力だけではなく差別や格差、抑圧などにも向き合い「平和」を多面的に考えることを重要視している。三つ目は平和の主体を社会で最も弱い立場の人びとの視点で考えること。内海が強調した点であり、国家や政府が主体となるのではなく、社会に生活する人、その中でも

特に最も弱い立場の人びとの視点なくしての平和はありえないとしている。四つ目は歴史的背景を必ずふまえるということである。現代史について、評価の難しさを含め丁寧に向き合えないと「現在の問題」を捉えることはできない。「平和」という言葉は曖昧かつ危うさをも内包しているため、このような四原則を踏まえ机上の安全保障論・紛争解決論などに終止しないような講義づくりが意識されてきた。

学生らは、平和研究入門の講義を通じて「日本と世界」、「個人と社会」について自らを問い直すようになり、そして2年次以降の扉を各々見つけていく。上村は、「大学の『平和教育』はその大学がどのような人材を社会に送り出したいかという方針にも大きく影響している」と述べている（『日本の科学者』2018.1）。恵泉で大学1年生全員にこの平和研究入門を必修科目として据えているということは、卒業後国連機関や国際NGOで活躍する人材だけでなく、一人の生活者として「平和」を目指す人間になるような教育を志しているということであろう。それはまさに秋田稔が提唱し、初代学長の村井資長が掲げた建学の理念の一つである「平和を目指す大学」としての姿勢といえる。

\* ノルウェーの平和学者、数学者1930年～ (大町麻衣)

## 座談会 「平和研究入門」のあゆみ

日 時：2018年3月30日（金）13時半～15時

場 所：世田谷キャンパス理事会議室

スピーカー：石井摩耶子・内海愛子・大橋正明・上村英明  
(以上教員)・小関毅彦(職員)

出 席：吉川俊子・西島黎・土屋昌子・宇野緑・松井弘子・  
安藤和子・大町麻衣・西尾尚子 司会：森恵

\* \* \*

1988年から現在まで「平和研究入門」を各年代に担当した教員4名と、教務課で大学の平和教育の変遷に立ち会ってきた職員をスピーカーとして招き、講義のねらい、忘れ得ぬ思い出などについてお話を伺った。

\* \* \*



### 1. 「平和学」と栗野鳳先生

司会：大学開学と共に始まった「平和学」だが、当時担当された栗野鳳先生はすでに亡くなっている。

石井：栗野鳳先生の授業は220人の1年生全員を大教室で教えるという形式の授業だった。今思えば対話形式や先生

へのインタビューを取り入れて、先生の体験をもっと語っていただいても良かったのかもしれない。JVC（日本国際ボランティアセンター）などいくつものNGOを育成された。官僚であり、大使の経験がある栗野先生の構築された「平和学」の授業を、私たちはどのように改革し継承していくかという課題が今もあると思う。

内海：栗野先生は日本の外交という大きな視点から平和のために努力していた方である。当時はまだ若い大学1～2年生に対して、平和に関する問題をどのように提起するかが課題だった。設立当初から恵泉は平和のために活動する女性を育てる大学を目指していた。この設立の趣旨から出てきたテーマが「平和学」だったと思う。

### 2. 「平和研究入門」における学び

内海：「平和研究入門」に変わった1992年、栗野先生、大日向雅美先生と3人で担当した。授業では日本の中におけるマイノリティ、少数者の人権というところに焦点をおいた。在日韓国・朝鮮人の日本における差別の問題を、歴史にも触れながら取り上げた。特に改正運動に関わっていた国籍法において、女性に国籍継承の権利が与えられていないという具体的な問題を提示して、戸籍と国籍の問題を提起した。1985年に国籍法は改正され、国際結婚をした日本人女性の子が日本国籍を取得できるようになった。

大橋：私は栗野先生の後任として入った。それまで国際赤十字のスタッフとしてバングラデシュに駐在しており教員としての経験はなかったが、内海・石井両先生と中東を専門とする宮治先生の4人で担当した。1994～97年はオムニバス形式で複数の教員が授業を担当した。なるべく学内リソースを使うようにということで、尾崎安、本間次彦、蓮見博昭といった先生方が喜んで引き受けてくださった。基本的には前期は直接的暴力として太平洋戦争や沖縄の問題を扱い、後期は構造的暴力として差別や貧困の支援の在り方を扱った。沖縄については沖縄戦のフィルムなどを使いながら、自分自身も勉強させてもらった。オムニバス形式の時は私もすべての授業に出て、採点は一人でやっていた。しかし学生数が2～3倍になるとそれまでのやり方では無理になり、古沢希代子、小泉允雄両先生も加わった。それでも前期と後期で人数の分け方を工夫するなどした。

石井：私はYWCAでボランティアをする中で恵泉の卒業生たちと出会い、河井道先生の平和への想いをお聞きした。その中で、キリスト教に根差した平和ということが大学教育の核心にあると考えていた。授業では、1982年に制作された「ダーク・サークル」というドキュメンタリーを題材に「核と人間」を取り上げた。他には地球環境問題、水俣病、原発。平和と経済の問題では貧困と紛争の悪循環、軍産複合体、新国際経済秩序について取り上げた。平和に関する思想と行動については憲法9条の問題も盛り込んだ。東西冷戦が終わり今後は軍縮が進むだろうという期待の中で現実はどうなのかという問題について、平和憲法を考察し直す必要があった。しかし憲法制定の背景にある

極東委員会や占領政策について、もっときちんと洗い直すべきだったという反省もある。また核について取り上げた中では、「核拡散禁止」条約について議論していた当時に、「核兵器禁止」条約の実現のために平和学会で署名運動をしていることも学生に投げかけた。今思えばそうした署名などの運動が2017年に国連で決議された核兵器禁止条約につながったと言えるだろう。

上村：私は明治学院大学国際学部国際平和研究所に特別所員として勤めていた。2001年非常勤講師として「平和研究入門」を担当し、翌年専任となった。先住民族問題が専門であり、授業では北海道と沖縄の問題を扱った。授業を担当するにあたって、また平和を考える上で専門以外の分野も学ばなければならず、今にして思うと私の使命だったような気もする。2005年以降、高橋清貴、堀芳枝、李泳采、楊志輝などの各先生が加わる中で、時々研修をし、テキストとして堀先生を中心に『学生のためのピース・ノート』を作った。先生方が個人として抱えている平和への思いを自分の専門に引き寄せて、その文脈の中で語る平和学が基本であり、議論できたらうれいと思う。1990年代から2000年代初頭と今の大学生は大きく変わっており、「これは大事なことから知ってはいけなくてはいけない」という

ことだけでは理解されず伝わらない。今の時代に平和学をどのように構築していくのかは課題である。必修科目として平和学の講座があることは恵泉の素晴らしい点であるが、平和学の基礎の部分をしっかりとプログラム化する必要があるのではないかと考えている。また、恵泉の平和学は視野が広く、先生方が自分の体験の中で学んだことを教えており、学生にとっても体験学習のひとつである。さらに市民社会教育を担うのも、平和学の大きな課題のひとつだと思う。

大橋：人間社会学部ができた時にフィールドスタディを始めたが、第三世界だけでなく、ドイツやアメリカにおけるテロや人種間の問題を同時に取り上げた。以前から大学院でも平和学的な要素を強めようと努め、専門家を集め日本初の平和学修士号が取得できるようになった。シビルソサエティ（市民社会）という点では、韓国の聖公会大学との間を内海先生が見つないでくれた。聖公会大学にはアジアのNGOに関わる人たちに1年～1年半で修士号を与えるように英語で行うプログラムがあった。アジアのNGOのネットワークでそれを支援し、恵泉も支援に加わった。聖公会大学側も恵泉の平和学の在り方や園芸教育に関心を持ち、互いに学び合う機会となった。最終的にはCivil Society Education Network in Asia (CENA) という組織になり7年目を迎えている。参加しているのは、日本からは恵泉と聖心女子大学・早稲田奉仕園、韓国からは聖公会大学と韓信大学、台湾の世新大学、タイからはバンコクのムスリムのリベラル組織、インドネシアからはイスラム大学が一緒になり、合宿などを行い学び合っている。平和学の具体的な形であり、恵泉の平和学が学外に伝えられている。

石井：イギリスでは以前からワールドシチズンシップの教育プログラムがある。これを大学院で扱ったことがあるが、戦争要因としての偏狭なナショナリズムを克服するために重要であり、アジアのネットワークともつながっていると思う。

上村：平和という言葉はどのようにも使え、学生たちの中には平和に関して全く意識がない人も多い。逆に平和に関して意識が高い人でもマイナスのイメージを持つ人もいる。2013年に『学生のためのピース・ノート』を作る際、恵泉で平和を語る視点をまとめ、「恵泉平和教育四原則」として明確化した。（本誌3ページ参照）

内海：恵泉女学園大学は1988年に開学したが、この年代は平和学にとって重要である。日本では1970～80年代に初めてアジアというものが具体的に視野に入ってきた。それまでは日本が占領したアジアに関する歴史研究も地域研究もなかった。恵泉の場合は外交官という形で現場を知っている栗野先生や、「現場」を歩いている私たちが担当していることが大きな特徴だと思う。1982年に出版された『バナナと日本人』は平和学における先駆的な業績だと思う。これに続いて私は上智大学助教授（当時）の村井吉敬先生らとともにエビ研究会を組織し、一匹のエビから日本とアジア

## 恵泉あれこれ (24)



### カリヨン

「なんぢら我に學びしところ、受けしところ、聞きしところ、見しところを皆おこなへ、さらば平和の神なんぢらと偕に在さん。」（ピリピ人への書4章9節）※文語訳聖書より

2008年5月24日、大学開学20周年記念式典の中で献鐘式が行われてから早10年余り。毎日4回（1限開始前、礼拝開始前、昼休み開始時、4限終了後）の他、様々な行事時などにフランス・パッカール社製の2オクターブ19個からなるカリヨンが、賛美歌を中心に多くの曲を奏で、その音色が多摩キャンパスに優しく鳴り渡っている。

恵泉女学園にその生涯を献げ、音楽をこよなく愛された河合ハナ先生（元副学園長、元短期大学英文科主事）のご遺贈金の一部により設置され、冒頭の言葉は最も大きなカリヨンに刻印されているハナ先生の愛誦聖句である。

学内ですれ違う学生が、カリヨンで流れていた賛美歌を口ずさんでいるのを耳にし、ハナ先生が願われたように今日もまた一人ひとりの心へと、風に乗って平和の神が生きて働いておられることに喜びを感じている。（宇野緑）

アとの関係を考え、伝えてきた。エビの調査ではマングロープの沼地を歩く。ある時やっとたどり着いた小さな島で「大東亜共栄圏の再建のために来たのか」と言われて驚いた経験もある。吉田裕先生（一橋大特任教授）の研究でも明らかになってきたが、エビの調査を通して日本の占領や兵士の餓死、慰安婦問題も見えてくる。授業では先生方が自分の得意分野でアジアを引き寄せて語れるというのは強みだと思う。

石井：時代状況とえば、女性の社会参加が進んだ時代と重なった。1991年に金学順（キム・ハクスン）が自ら元従軍慰安婦として名乗りを上げて以来、この問題が大きく取り上げられた。女性でしかも最底辺の苦勞をした人が自ら発言をするようになり、それに対応する時代が来ていた。かつて河井先生にも、「世界の人々の半分は女性であり、女性が国際情勢に目覚めなくてはならない」という気迫があったと思う。

小関：平和学という科目がどうして必修科目になったか、記憶されていることがあったら聞きたい。

石井：私は秋田先生と初めてお目にかかった時、新しい大学をつくるにあたってあなたを同志として迎えたいと言われ感動した。私が平和について書いたものをお読みになったのかもしれない。「平和を目指す大学」という村井資長学長の第1回入学式の式辞は重要な言葉だったと思う。

内海：村井資長先生は式辞で、「キリスト教精神を基盤に世界に開かれた人間、世界平和に貢献する女性を育てていこう」という河井先生の理想と、その実現のために平和学・平和研究を専門にしている先生を多く迎えたとも語られた。

石井：当時平和学という分野はまだ確立されていなかったが、平和学会でもそういう大学をつくりたいと努力していた。大学に平和学を定着させることは、秋田先生の願いだったと思う。

小関：1991年に大学設置基準の大綱化があり、1992年以降は比較的自由に大学でカリキュラムを作ることができるようになったが、それ以前は新設の学部・学科には厳しい基準があった。担当者の業績と担当講義名の間に整合性が求められ、そこで栗野先生の「平和学」が4年間設置された。

上村：恵泉の平和教育は大学全体で行っていて、平和研究入門は学問の入り口だと思う。入り口を見つけた学生は、それまでの発想を切り替えて、新しい視点でものを見ることができるようになり、専門の勉強に入っていく。

大橋：恵泉の学生としてアジアに関わるときに知っておくべきこと、かつて日本が植民地を持っていたことや、経済進出で何が起きたかを平和研究入門で学んでいきたい。

小関：大学設立当時も、フィールドスタディで特色GPを取った（文部科学省により「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された。年表参照）時も、「市民の育成」という言葉を非常に強く意識して使った。本当に市民が力を持たなかったらこの政治は変えられない、平和を作れないという思いがあったと思う。この意識が大学内で共有され

## 河井道をめぐる人々（24）

ポール・ラッシュ  
(1897～1979)



ポール・ラッシュ記念館所蔵

ポール・ラッシュは1925年、関東大震災で被害を受けた横浜YMCAと御殿場集会所再建のため米国YMCAから日本に派遣された。復興支援後、ポールは聖路加国際病院建設募金活動に従事し、立教大学教授として、一生を日本の青少年のために捧げる決心をする。

1941年12月8日日米開戦の日、河井は立教大学にポールを見舞った。「ミチは勇敢だった。恐れを知らぬ女史だった。天を見上げ、私のために祈ってくれたあの姿をはっきりと覚えている。憲兵隊たちに連れて行かれようとしている私にミチは『大丈夫ですよ、神共にいます』と勇気づけてくれたたった一人の友人だった」とポールは述べている。

知日派としてマッカーサー司令部に配属され再来日。GHQで再会した河井から「私は女子教育のため、貴兄は男子教育の為に励み合いましょう」と声をかけられたという。その後は清里農村センター（KEEP協会）設立に奔走した。現在河井道とポール・ラッシュは、共に東京霊園に眠っている。

（廣嶋都留（普15回、短英1回、元ポール・ラッシュ秘書）

ていることが大切であり、平和研究入門が教育していく力を持っていないかと思う。

内海：1年生は、平和研究入門と教養演習で自分たちがどういう社会に生きているのかに目を向けながら自分の将来を考え、社会のことを考えていくようになり、2～3年生になると随分と変わる人が増えてくるように思う。

大橋：市民という言葉や概念を、平和学の中でどれだけ押し広げていくかが極めて重要だと思う。1990年代は国際からグローバル化へとよく言われた。しかし経済とITだけがグローバル化し、人権はグローバル化していない。またアジアではナショナリズムが市民性を抑え込む傾向もある。グローバル化は不可避だが、その中で私たちが優先しなければならないことは生活者同士のつながりである。命を大切に作るつながりは恵泉らしさが生かせるテーマでもある。

内海：平和研究入門では100円ショップを取り上げ、中国に行ってしまう労働者が製品を作っているのか取材し、ビデオを制作したこともある。私たちは平和をどう具体的に提起していくかという問題に常に直面しているのだと思う。学びの場は探そうと思えばいろいろとある。

上村：恵泉で1年生はキリスト教入門も履修するが、キ

リスト教を学ぶということは、キリスト教を中心とした今の文明の在り方や社会を知るという一面もある。体験の中でそれと違う世界があるということを知り、平和の在り方、多様性や多元性の問題に気付いて欲しい。

大橋：CENA では意識的にイスラム教の人も入れてきた。世界には様々な形の宗教対立がある。アジアにおいても今後の朝鮮半島情勢によっては大量の難民が発生する可能性があり、そうした時に私たちが目指している平和学の中身が問われるのかもしれない。

\* \* \*

座談会を通じて恵泉女学園大学における30年間の「平和研究入門」の歩みは、キリスト教に根差して最も弱い立場の人々に目を向け、現場に赴いて学ぶ姿勢が貫かれていることが語られた。参加者からは「河井先生は『平和』を生きていく上での願いとされていた。」「河井先生は国際的な友人を多く持っていた。」「創立当初の恵泉には外国からの訪問者も多く、そうした方々を通じての奉仕活動をしていた。」という思い出も語られ、河井道の信仰に基づく平和への思いを受け継ぐ「恵泉の平和教育」を語る機会となった。  
(森 恵)

### 「平和研究入門」および大学での学び ～卒業生からのコメント～

#### ◆赤松結希（1995年度卒）

(株) オルター・トレード・ジャパン

平和研究入門で学んだ「構造的暴力」という言葉が非常に印象に残っている。外部講師として国際協力 NGO の方のお話などを伺うことができたのは貴重だった。

大橋正明先生、内海愛子先生、石井摩耶子先生、宮治一雄先生、最首悟先生など、実際にフィールドで活躍されている多くの先生方の講義を聞き、実際の活動現場に連れて行っていただいたことは大きな刺激となった。

#### ◆金子真夕（2002年度卒・2006年度大学院修了）

公益財団法人中東調査会

内海愛子先生の「平和研究入門」に始まってすぐに引き込まれ、「大学の授業って面白いんだな」と教えられた。ドイツ FS への参加をきっかけに履修した内藤正典先生の講義も面白く、イスラームやトルコ、ヨーロッパで何が起きているのかを学び、単位取得後も“自主出席”していた。当時の講義ノートは今でも大切に持っている。「平和とはなにか」を問い続けることは、現代、そしてこの先どのような時代になっても最も重要なことで、学生自身の財産になる学びである。その導き手として学生と真摯に向き合ってくれる先生方の存在がとても大きかった。

#### ◆蘇畑光子（2004年度卒）

特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン

大学の授業は、現場（フィールド）での学びの機会が多く設けられていた。また NGO や平和活動などに実際に関わっている先生方の講義はリアリティがあった。チュニジアへの FS を決めた年にアメリカ同時多発テロ事件が起きたことが忘れられない。FS は無事に実施されたが、日々ニュースで報道される「テロリスト」とされる人々と、私がチュニジアで出会った穏やかなムスリムの人々とのギャップに、人種や国籍、宗教といったカテゴリで一緒に判断するのではなく、あくまでも個の人間としてとらえることが大切なのだと言った。異なる文化・社会的背景を持つ人々の間に身を置き、マクロではなくミクロの視点で、個人として一つ一つの物事や出会いを経験できたことは、本当に貴重だった。

#### ◆玉木杏奈（2007年度卒）

特定非営利活動法人日本紛争予防センター在トルコ代表

国際協力・開発に係る基礎知識をしっかりと身につけることができた。支援する側とされる側、途上国の脆弱性の高い人々や、彼らの生活や直面している問題に対し、無意識的に偏見を持っていたことに気づかされた。人生の転機となった FS では、事前授業で語学だけでなく、アウトサイダーとして現地に入る際の心構えや Do No Harm の概念をしっかりと学んだ。大橋正明先生からの厳しい指摘や指導はその後の英国大学院や仕事でも大いに活かされている。園芸の授業も印象深く、天候と土、野菜との関係や、地球の恵みの有難さ、地球に生かされている感覚は、開発学や平和学にも通じる学びであった。

## 恵泉女学園史料室利用案内

### ◆開室日

火・木・金

### ◆開室時間

9時30分～16時00分

※夏季・冬季休暇中の開室日についてはお問い合わせください。

### ◆閲覧

事前に史料室に来室希望日や閲覧希望資料についてお問い合わせください。

ホームページ (<https://www.keisen.jp/gakuen/gaiyo/archives.html>) に、「恵泉女学園史料室所蔵資料目録」その1～その3および「史料室だより」1～23号を掲載しています。

### ◆利用の制限

個人情報やプライバシーに抵触する情報が含まれる資料など、閲覧いただけない資料もあります。

### 史料室からのお願い

【生徒手帳】1958（以下高校用）1967・1980・1982・1983・1985・1988・1989・1991～1998・2000・2002年度 【卒業アルバム】高校1・10・11・13・16・17・19・21・22・68回、高等部4回、短大英文科3・4・5・6・7・8・9・26回、短大園芸科1～14・28回、大学1994・2001・2013年【校章】「恵泉」の文字が縦書になっているものを探しています。その他1990年代頃までの礼拝・行事の式次第やプログラム等をお持ちの方は史料室までご一報をお願いいたします。

運営委員長：中山洋司 室長：宇田川篤  
運営委員：宇野緑 服部伸江 松井弘子 森 恵  
室 員：安藤和子 大町麻衣 西尾尚子

恵泉女学園史料室  
〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-8-1  
Tel・Fax 03-3303-6920  
メールアドレス ksshiryoku@keisen.ac.jp